

発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

ガリラヤへ行きなさい

— 188殉教者の列福をひかえて —

古巢 馨

長崎教区司祭

ガリラヤへ行きなさい

望みを失い途方にくれる弟子たちに復活した主が最初に告げられた福音は、弟子たちとの再会の場所でのものです。「わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる。」(マタイ28・10) イエスはこの場所を3度も(マタイ26・32、28・7、28・10)確認しています。なぜガリラヤだったのでしょうか。

弟子たちが初めて「真の幸い」(マタイ5・11-12)を耳にし、イエスの呼びかけにすべてを捨てて従うことを決意し、神のことばに養われ、そして初めて派遣された場所、それがガ

リラヤです。神との親しさを育み、イエスと共に生きた蜜月の時代です。復活した主は、十字架の前で挫折した弟子たちを再び派遣するためにガリラヤへ呼び、彼らに「近寄った」(マタイ28・18)のです。「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」(同28・20) 派遣のための確かな保証も与えています。かつてホレブの山でモーセを派遣された、「わたしはある」というお方(出エジプト3・1-14)の姿を想起させます。

日本の教会のガリラヤ時代

ザビエルによって誕生した日本の教会は、その後60年の間に約76万人

の信者を数えるほどに成長しています。多くの日本人の魂に届く福音を伝えることのできた教会があったのです。その豊かな霊性をもった教会で、やがて始まる厳しい弾圧時代の無数の殉教者たちの信仰は育まれていったのです。日本人が初めて「真の幸い」を耳にし、感動し、育まれ、成長していった神との蜜月の時代を、わたしは「日本の教会のガリラヤ時代」と認識しています。復活した主は今もガリラヤで待つておられ、わたしたちの教会をそこから再び派遣させてくださいます。

殉教者たちを育んだ教会

「わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。」(ヨハネ13・15) 「愛して、この上なく愛し抜かれた」イエスが、十字架を背景にした最後の晩餐の席で言われた言葉です。日本のガリラヤ時代の教会に、イエスの模範を限りなく生きた形跡を見ることが出来ます。

あの時代、信徒たちの中で誕生した3つの働きがありました。「慈悲の組」「聖母の組」「聖体の組」です。「組」(コンフラリア・兄弟会)とは、今日の「小共同体」に似た働きです。現在列福を申請中の殉教者たちの中には、この3つのいずれかの組の世

話役をしていた信徒がたくさんいました。慈悲(いつくしみの行い)の組によって「社会の痛みや悲しみのあるところに近づくと教会」(ルカ4・16-19、7・11-17)の姿が示されました。聖母の働き(教えを学び、伝える行い)の組によって「亡びないものを選び取ることで信者たちを育てる教会」(マタイ16・24-26)の姿が示されます。聖体ニコムニオ(祈りと聖体に支えられた一致の行い)の組によって、「同じ信仰、聖体の絆で結ばれた一つの教会」(マタイ18・19-20、使言2・46-47)の姿が示されます。そしてこの3つの働きは、キリストの「王職」「預言職」「祭司職」と重なります。教会の根本的、普遍的な生命活動です。

殉教者列福は神からの呼びかけ

教会の歴史は、殉教者たちに光が当てられるとき、決まって新たな歩みを始めてきたことを伝えています。そして、時の教皇の面影が色濃く反映されています。

1619年、激しい殉教時代を迎えた日本の教会のために、教皇パウロ5世は「特別のゆるしの年」を布告しています。そのときの教皇の手紙が殉教者たちの信仰の支えになっています。1862年、信徒発見を直前にピオ9世は日本の26殉教者



を列聖しています。それを機に、世界の教会は日本の教会の復活と再宣教に向けて祈り始めています。

そして今回の188殉教者の列福申請の契機は、教皇ヨハネ・パウロ二世の来崎でした。教皇は日本の教会、特に長崎を「殉教者の信仰に基礎を置く教会」と定義しました。それに応えて、日本の司教団は、「かつて日本の教会を支え、世話してきた代表的な殉教者たち」に光を当て、今日の教会の道標とするために殉教者列福の申請手続きを開始しました。

「日本26 聖殉教者」「日本205 福者」「聖トマス西と15 殉教者」の列聖・列福は、いずれも関係する修道会が申請者でした。今回初めて日本の教会が独自に、全国各地の代表的な殉教者（188人中、5人を除けばすべて一般信徒）に光を当てたのです。

「殉教者の血はキリスト者の種です。」
地方教会が新たな歩みを始めようとするとき、神の恵みは普遍教会との絆の中で、殉教者たちの信仰を想い起こさせ、そこから現代を生かす豊かな霊性（教会、家族、夫婦、親子、仲間、司祭の…）を汲み取らせ、明日に向けて「キリストの模範」をしっかりと確認させるのです。

今回の殉教者列福は、日本の教会のための「神の発意による恵み」「呼びかけ」だと受け止めます。いま日本の教会に与えられようとしているこの恵みに、喜んで応えたい（イザヤ55・10～11）ものです。

Q & A

一八八殉教者列福推進

Q. 一八八殉教者列福については、小冊子「わたしは模範を示した」を読んで知っていますが、ほかにも多くの方々が殉教されたのに、なぜいま一八八名なのでしょうか。

A. それについては、この小冊子のはじめに、日本の教会の列福運動推進の責任者である溝部脩司教様が、次のように述べておられます。

「今回の選択の基準は、現在までの福者、聖者が外国人聖職者が圧倒的に多かった事実を考え、日本人に焦点を絞った。しかも、聖職者に偏らず、老若男女の一般信徒を意識的に選択した。さらに日本全国を網羅して、ある教区だけに偏ることを避けた。また、自分の聖職を生き抜いた日本人司祭の数名を選ぶことで、現代社会に宣教する司祭の霊性の模範

とした。これらの選択の基準は、現代に生きる信徒に成聖への道を歩むように励ますためである。」

つまり日本の教会全体の代表的意味が込められているということでしょう。ほかにも無数におられる無名の殉教者たちとの連帯の中で、この列福事業が進められているということになります。そしてさらに、物質的に異常なほど発展した現代社会のひずみの中で、人間性を殺してしまう、目に見えない迫害とたたかっている方々とのつながりの中で、この運動は進められているということにもなりましょう。

Q. 列福式や列聖式に至るまでには、どのような段階があるのですか。

A・教会の頭としての教皇が、死亡したひとりの信者が存命中に聖なる生活を送ったこと、あるいは殉教死したこと、そして現在在天に在住していると公に宣言するのが列福式です。その列福宣言に至るまでには、その人物の生涯・徳行・著作物・聖徳の評判について長年にわたる調査が行われます。この調査はその人が生活または、死亡した場所の司教によって行われるのが普通です。

殉教者の場合には、当人の取り次ぎによって行われる奇跡は、第1段階の手続きでは必要ではありません。第2段階の使徒座における手続きは、第1段階の手續きにおいて、その人が徳を英雄的な程度にまで実行したことが、または信仰のために殉教死したことが立証されたときに、聖座によって開始されます。

その後さらに二つの奇跡がその福者の取次ぎによって行われたとき、教皇は公にその福者を聖人の列に加えると宣言（「列聖」）することになります。

（『現代カトリック事典』より）

Q・ある人々を福者や聖人として崇めることはとても良いことですが、その人々を過度に英雄視したり、殉教者の行為を行き過ぎ

るほどに美化してしまう危険はないのでしょうか。

A・その点についても、列福推進の責任者である溝部司教様が次のように述べておられます。

「問題は、過去を生きた殉教者たちの熱い思いを、きちんと伝えきれない教会の側に責任があると思われる。何となく過去の歴史の繰り返しのような説明がなされたり、単に信心を高める教訓のようにとらえたりする提示の仕方に問題を感じる。現代に生きる私たちがしっかりと理解しないというところに問題を感じる。または、感じさせることがない教会の在り方に問題を感じる。単なる殉教美談にしてしまったり、現代の私たちに真摯（しんし）なメッセージとして発せられていないからである。」

殉教者を過度に英雄視するのではなく、私たちとあまり変わらない弱さをもつ人々に、あれほどの英雄的行為をなさしめた神の恵みの偉大さを讃え、その恵みを願うことが肝要です。

殉教の持つ社会的視点を学ぶ意味で、久賀島の「牢屋の窄」の碑文はとても示唆に

富んでいると思います。

「久賀島のカトリック教徒は、あどけない幼児から、60余才の老人に至るまで（入牢者中最高齢者はジワンナえつ87才、野浜安五郎氏の非常日記）、神の恩恵に支えられ、超人的精神力を以て、この比類のない苦痛を耐え忍び、信仰の自由と良心の尊厳とを身をもって主張し、信仰に生きる久賀島カトリック信徒の魂の偉大さを発揮したものである。」

（囚獄碑文より）

つまり、殉教者たちは、神の恵みに満たされて信仰を守り通したというだけではなく、その尊い行為によって、自由に信仰できる社会、人間の尊厳が大事にされる社会の建設を、身を持って訴えたのだということです。

列福推進に参加するとは、このような殉教者のメッセージを正確にとらえることでもあると言えるでしょう。

列福式の日時についてはまだ確定されてはいませんが、その筋の情報によると来年（2007年）の年末にかけてとも言われています。

「参加する教会」をめざして (6)

全員参加の教会



私たちの教会は、「現在のあり方」を続けていてもよいのでしょうか。あるいは、「もつと理想的なあり方」があるのでしょうか。

そのことに関して、全アジアの司教様方の集まりであるアジア司教協議会連盟の、1990年に開催された第5回総会の決議文書は、私たちに、教会の「古いあり方」から「新しいあり方」、すなわち「全員参加の教会」づくりに向けて前進するよう、と勧めています。

A. 教会の「古いあり方」と「新しいあり方」

ここで言われている教会の「新しいあり方」という発想は、1960

年代に開催された第二バチカン公会議の考え方を受け継いだものです。「新しい」というからには「古い」ということも念頭においてのことだと思います。

そこで今回は、これまでの「まじめ」という意味も含めて、その「古いあり方」と「新しいあり方」という問題について取り上げてみることにいたしました。

①与えこける教会

私たち信徒が長いあいだ抱いてきた教会のイメージは、「何でも与えてくれる教会」というものでした。しかし、現在の教会の信徒は「自分たち自身の方法でキリストの祭司的、預言者的、王的任務を分かち合い」、

「教会における、また世界における全キリスト者に委ねられた使命を推進する」必要があると、アジアの司教様方は述べておられます(第5回総会決議文書・31番参照)。また、1983年に改訂された『新教会法典』では、「すべてのキリスト信者は、…それぞれ固有の立場と任務に応じて、キリストの体の建設に協働する」(第208条)必要があるとも述べられています。

②信徒は司祭のお手伝い

第2次世界大戦後、「カトリック・アクシオン」とか「信徒使徒職」などという言葉が聞かれるようになり、信徒も教会の使命に積極的に参加するためにたくさんの方

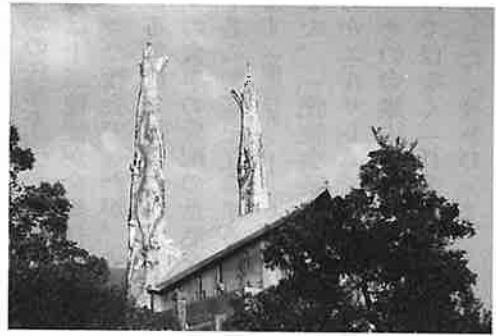
活動団体が生まれ、大きな成果を上げるようになりました。それまでの信徒たちは、教会の指導者に言われたことをする、「聖職者の手足の延長」のような存在にすぎませんでした。しかし、「新しいあり方」の教会においては、信徒は単に司祭に「手伝う」のではなく、キリストの使命における共通責任を「共に担い合う」協働者である、という考えに変わったのです(「教会憲章」31項、教皇ヨハネ・パウロ二世「信徒の召命と使命」第2、第3章参照)。

「協働」という新しいあり方における司祭やその他の司教的指導者たちは、「支配的」で「ポス的」な指導者ではなく、「仕える」というスタイルのリーダーシップを实践することになります。たとえば、信徒を励まし、仕事ができるように導き、育成し、元気づけ、そして彼らができなかった部分を補うのです。

③聖職者の仕事と信徒の仕事

現在でも、教会の仕事は聖職者がするものであって、信徒がするものではない、という考え方がまだ残っているようです。

日本の教会の現状、課題、展望 (2)



溝部 脩 高松教区司教

3. キリシタン時代よりの考察

「相対主義」という問題は、現代になってから起こったものではありません。キリシタン時代にも、同じような問題が起こっていました。

私は188名の日本の殉教者列福推進委員会の委員長をさせていたたいております。歴史調査という視点から、30年間もこの問題に携わってまいりました。

この運動を進めていく中で、昔のキリシタン時代にも現代と同じ問題をかかえていたという実感を持つようになりしました。私たちが現在感じている問題を、その時代の人たちも同じように感じていたはずで、彼

らは、迫害が起こって自分たちが生きるか死ぬか、という極限状態に追い込まれますから、泥沼の状況に陥る前に、その状態が終わってしまったのです。もしも迫害がなかったら、彼らも今の私たちと同じような問題提起をして、議論を重ねていたのではないのでしょうか。

ザビエルをはじめとする初期の宣教師たちは、日本の土壌にどのようキリスト教を土着化させるか、適合させるか、ということを経験した問題としました。そして、懸命にこの問題と取り組みました。フランシスコ・ザビエルの偉大さは、日本の文化を評価し、日本の文化の中にキリスト教をどのように伝えていくかを大切にしようとしたことだと思えます。

フランシスコ・ザビエルの後を継いだトレス神父も、同じ路線でした。1580年に来日したバリエーノ神父は、徹底して「適応」の方針を打ち出します。日本の文化の中にキリスト教を受け入れられる宣教をしないとけない、と主張しました。

さらに1590年代になりますと、神学生は日本の文化、日本の仏教、神道、などをきちんと勉強

するようにと教会は強調しました。問題がどこにあるかもきちんと分かるようにしました。その意味では、今の神学校よりもずっと進んでいたとも言えます。仏教をきちんと勉強して、仏教とキリスト教とを対比させながら、どのように仏教との対話ができるか、ということを学んでいたのです。

例えば、1600年に出版された、ペドロ・ゴメスの『神学要綱』という本があります。これは神学生のためのテキストです。それは3部に分かれており、その第2部では「仏教、神道、儒教」を扱っています。神学校で日本文化を徹底して勉強させたわけです。私たち日本人の中に染みついている仏教的なもの、儒教的なもの、この見方、これとキリスト教的なもの、この見方がどのへんに違いがあるのかを考えようとしたのです。こういう路線をしっかりとわきまえていたので、キリシタン文化が当時大きく花開くことができたのです。

でも、こういう動きに対して、いや、キリスト教はどこまでも外国の宗教で、日本の土壌には合わない、と考える人たちが、教会の内部にも出てきます。キリスト教は、やれ一神

教だ、絶対だ、などという価値観を持つてくるので日本人には合わない、と主張します。日本人は少し曖昧にしておきたい民族なので、何か押し付けられると感じると遠ざかってしまおうというのです。

このことを理論づけて主張する人もいました。ハビヤン・不干斎（ふかんさい）という名前の人です。ハビヤンとは洗礼名でしょう。元仏僧、あるいは仏教のお寺にいた人の方です。キリスト教に改宗して、神学を非常によく勉強しました。とても頭が良い人だったと思います。

彼は『妙貞問答（みょうていもんどう）』という本を書いています。これは3部に分かれていて、その第2部では仏教とキリスト教との対話をしています。浄土宗の妙宗（みょうしゅう）という尼さんと、キリスト教の幽貞（ゆうてい）という修道女の2人が対話をし、問答するのです。だから、『妙貞問答』というわけです。キリスト教ではこうなんだ、仏教ではこうなんだと、お互いに話し合いながら、弱いところを突いていって、最後は、キリスト教は仏教より上なんだ、という結論になります。仏教の尼さんとシスターとの対話を通してな

がら、キリスト教を伝えていくという試みをしているのです。

ところがこのハビヤン・不干斎は、この本を書いた後に、その内容を全くひっくり返してしまう本を書くのです。それは『破ダイウス(提字子)』という本で、デウス(神)という考えに反ばくする「キリスト教反駁論」です。

この『破提字子』を読みますと、いくつかのことを考えさせられます。現代にも同じような問題が存在しているからです。そこで、この本のいくつかのポイントをご紹介します。そのことを考えていきたいと思えます。

①「ナツラ(自然)」に即した生き方が、人間の生活の基本

「ナツラ」とはラテン語で、「自然」という意味です。自然に即した生活が一番であり、自然にもとること、すなわち不自然が一番悪いということです。自然に生活すればそれで十分ではないか、それ以外のものは要らないのではないか、ということです。自然の生活を度外視する宗教というものは受け入れられない、ということ。日本人には、不自然なものは要

らない、という感覚があります。村の真ん中には鎮守様があり、鎮守の祭りがあります。収穫があつて米が出来たら、鎮守の森で皆で踊って歌ってお酒を飲む、これが自然なのだ、ということです。毎週教会に行つてよく分からないミサに与るより、自然の中で手を合わせているほうがいいじゃないか、という見方なんです。

現代のカトリック信者の心の奥底にも、同じような感じがあるのではないのでしょうか。教会はあればありがたいけど、なくてはならないものだと感じていないのではないか、と思いたくなるようなところがあります。

②不自然の教えを強調するキリスト教は、受け入れられない

ハビヤンは、自分はキリスト教を捨てる、と言っています。あまりにも強制が多すぎて、受け入れられない。神のために殉教するなんて、自然に反し不条理だ。こんなばかばかしいことがあるか。教えのために死ぬことを勧める神父なんて許せない、ということです。同様に、独身性やゆるしの秘跡の問題にも言及し、宣教師というものは無用の長物である、とも言っ

ています。

現代でも、同じような問題が存在しています。宣教師不要論者がいます。ゆるしの秘跡とは何かというところが、現代教会にとつての大きな問題の一つになっています。司祭の独身性についても、いろんな議論が引き起こされています。

その底流にあるものは何でしょうか。人間は、そんなに無理をして生きなくてもいいし、毎日の生活だけを大事にして生きていけば人生は完結されていくという、「自然教」とでもいふべき考え方ではないのでしょうか。

③自然の理による倫理的に正しい人は、圧倒的に多い

キリスト教が伝わる前にも、倫理的に正しい日本人がいました。ちゃんとした立派な道徳律に基づいて生活していた人たちが大勢いました。ではキリスト教とは何か、という疑問がわいてきます。宗教を信じている人たちがむしろ生活態度が悪い、とハビヤンは言うのです。自分が知っている神父たちの中にろくな人間はいない、という言葉さえ使います。キリスト教を知らない人々の方がどんなに立派であるか。キリス

ト教が伝わる前にも、勤勉で誠実で人を裏切らず、きちんと生きていく日本人がたくさんいた、というのです。

このことばは、現代でも当てはまりそうです。人の悪口を言わないで生きている人々は、キリスト教徒以外にもたくさんいます。では、キリスト教徒とは何であり、教会に来るとはどんなことなのか、という疑問も生じてきます。

④教会の適用への批判

ザビエル以来の流れに対して、ハビヤンは厳しい批判をしました。日本の土壌に適用するとかいつていられるけれど、あれは方便に過ぎない。本当はキリスト教に引きずり込むために、一応そう見せかけているに過ぎないのだ、日本人を引きずり込むための方便なのだ、というのです。

私は歴史の勉強をした者ですが、400年前の歴史を知ると、現代がとてよく見えてくるのです。面白いと思います。では、今の私たちキリスト者は、生きていくためにどうすればいいのでしょうか。そのことについて、もう少し考えてみたいと思えます。

聖書

豆知識



Q 私たちは「聖書」という言葉を普通に使っていますが、もともと「聖書」とはどこから出てきた言葉なのでしょう。

A 聖書は神様のことについて書いてあるから、「聖なる書」だと言ってしまえばそれまでです。しかしよく考えてみると、聖書は外国から日本に入ってきた書物ですから、外国語にその起源があるはずですよ。その点に注目しながら考察してみましょう。

私たちはよく、聖書のことをカタカナで「バイブル」と表記してあるのを目にすることがあります。この「バイブル」という表現は、英語の“Bible”をそのままカタカナに直したものだということを、皆さんはすでにご存知のことと思います。しかし、でもその英語はどこから出てきたのでしょうか。

実を言うと、バイブルという英語はギリシア語から生まれた言葉なのです。具体的には biblia (ビブリア) というギリシア語ですが、「書物、文書、巻物」という意味を持つ語です。それは biblion (ビブليون) という語の複数形で、単数形である ビブليون は、書物は書物でも、小さくまとめられた「冊子」のよう

なものだと理解してもらえればよいかと思えます。したがって、その複数形が「聖書」というわけですから、様々な書が集められて作り上げられた「冊子集」、あるいは「書物集」のことだと考えられるでしょう。

その中に、イエス・キリスト以前のことだとめられている「旧約」と、彼以後のことについて書かれた「新約」とがあるわけですよ。

Q 聖書には旧約聖書と新約聖書があることは分かりましたが、そこに含まれている各書は、その当時、神様とその救いについて書かれたものがすべて含まれているのですか。それともその幾つかが選ばれて、「聖書」としてまとめられたのですか。

A 必ずしも全てが含まれているとは言いきれません。なぜなら、確かに神様のことについて触れながら書かれているものであっても、その全てが聖書に含まれてはいないからです。少し専門的になるかもしれませんが、聖書の中に含まれるためには、それぞれの書の内容の信憑性が問題になるでしょうし、また私たちの信仰に真に適しているかということも問われることとなります。だから、ある基準を満たしていなければ、「聖書」に含まれるにふさわしいとは言えないのです。

私たちは、そのことを「正典」という言葉で表現しています。つまり、簡単に言えば、

聖書に含まれる書であれば正典であるし、もし含まれていなければ正典ではないということになります。

日本語でいう「正典」という言葉は、外国語では“Canon” (カノン) という言葉で表現されています。これもギリシア語の“kanon” (カノン) がそのまま入って来ているのですが、もともとは前回皆さんにご説明したヘブライ語の言葉からなのです。ヘブライ語では“qaneh” (カネー) と言い、川の水辺に生えている「葦」を意味しています。それが派生的に重さや長さを量るための「かり棒」という意味を持つようになり、さらにそこから「基準」であるとか「規範」であるとかという意味が出てきたのです。だから、聖書にふさわしい基準を満たしているからこそ、今私たちが聖書の中で読んでいる各書が、「聖書」を構成しているわけです。

ちなみにヘブライ語の「カネー」は、旧約のイザヤ43章24節で、派生的に「量り」として用いられています。またギリシア語の「カノン」は、新約のガラテア書6章16節で、「原理」という言葉に訳されています。

(湯浅 俊治)



Catholic Archdiocese
NAGASAKI

いざな ミサへの誘い



この春、小学2年に上がったばかり孫の恭一とテレビを観ていました。彼が来ると、チャンネルの優先権は自動的に彼の手中となります。五人の孫たちは、隣に住んでいます。眼に入れても痛くなかった彼らでありましたが、成長するにつれ、小鳥が巣立ちするように彼らは遠のいてしまいました。唯一、慕ってくれるのは彼ひとりだけになり、時々電話をくれます。「ジヤ イマ何している?」「テレビ観ているよ。」「君は何しているのか?」「何も…。」

会話まで友だち付き合いになりました。よき友です。昨日から顔を見ていない。一日一回見ないと、落ちつかない。こういうのを、何とか依存症と言うのでしょうか。

「遊びに来てもいいよ」、一応鷹揚に言いました。この子には勉強という概念がまったくなく、いまだに保育園の年長組の感があります。「少しは勉強せい」と言いたいが、情けないことに、巣立ちが怖くて言えません。

ある日、彼の耳元にささやきました。「恭一は頭がよさそうだから、お医者さんにならんね」とおもねった。彼は素直に“なるよ”と言ってくれるものと信じて、次なる台詞まで準備していました。「だったら、勉強せんばね。」しかし、その期待はみごとにはずれました。

「おれね、神父様になると。」長女がシスター志願生、長男が小神学生。環境が言わせているのでしょうか。悪い気はしませんでした。が、あとがいきません。

「神父様になってエ・・・、お金をためてエ・・・、お父さんと、お母さんのために家をつくってやると。」子は親の背中を見て育つ、と言います。この子は、親ならぬジジイの背中を見て育ったのでしょうか。反省の日々であります。

構造改革…。「改革」ということばは、それが何であれ、心地よく響きます。その響きは長崎教区にも流れを感じます。内部の事情はよく分かりませんが、側で見ていると、カトリックセンターの構造改革が徐々に見えてきます。中でも、宿泊施設とレストランが変容しているようです。赤字経営から黒字経営に生まれ変わるのも、そう先ではないようです。武士の商法ならぬ神父商法ですから、わたしはあまり期待していないのですが、“赤字だけは出してくださるな”と、資本投資の信徒の一人として祈るばかりです。

改革の一つは、宿泊施設が“ユースホテル”方式になったことだそうです。それまで長年の経験を持つ、一人の従業員の提案から生まれたこととです。この方とは一度お会いしたことがあります。余分な肉がなくて、皮と骨が一体になっているような、実に瘦身の方です。細い首の上には微かに残った頭髪が揺れていました。お笑いになると顔中が皺になり、わたしは一瞬、むかしテレビで見た「ひよっこり瓢箪島」の人々を思い出しました。人柄でしょうか、こんな失礼なことを書いても決して怒らないであろうと、その時の印象を今も持っています。

この方は、宿泊のお客さんに誰彼かまわず、浦上教会の早朝ミサの時間についてご案内なさるそうです。お客さんは「え?・・・私たちでも行っていいのですか」と驚き、喜んで参拝するとのこととです。皆が皆とはいえないまでも、その話を聞いて、わたしはふと、“福音宣教”ということばを思い出しました。ちなみに、この方は未信者（わたしの嫌いな言葉）だそうです。

信徒使徒職生活74年。“恥ずかしながら”まだ一度も人さまを誘ったことがありません。名ばかりの信徒が、反省させられました。

(水浦 久之)

ザビエルの足跡を訪ねて



「ザビエル歴史街道」の案内図

去る4月6〜7日に、「フランシスコ・ザビエルの足跡を訪ねる旅」という名の鹿児島巡礼が行われた。ザビエルの誕生日である4月7日に合わせたフォト・プランの山本さんの企画だったが、いろいろな教会から45名が参加していた。

そこで今回は、この巡礼に参加した方々にいろいろと伺ってみることにした。

◇巡礼に行こうと思われたのは、どういうきっかけからですか？

私は昨年、「みことば友の会」主催の自分一人ではなかなか見ることのできない場所を案内していただきました。そこで、今回も同じ方の企画だったので参加したいと思ったのと、今年がフランシスコ・ザビエル生誕500周年で「ザビエル年」を祝っているからです。

私たちがこの宗教を信じているのはこの聖人が日本に来てくださったからであり、もし来てくださらなかったら、カトリックの信仰に出会わなかったわけです。そう考えると、日本人はこの聖人の誕生日をもっと盛大にお祝いしても良いのではないかと思っている矢先に、この巡礼の話を伺いました。そこで、鹿児島へ行つて、この聖人の誕生日に合わせてミサに与りたいと思ったのです。

◇今回は、どこへ行かれたのですか？

①人吉教会 ②人吉城歴史館 ③鹿児島上陸記念碑 ④4番崩れ・53名墓地 ⑤一字治城跡 ⑥ザビエル教会(車窓) ⑦京泊教会跡 ⑧川内教会(ミサ)へ行きました。その中には、あまり知られていない場所がありました。二方所だけご紹介します。

*4番崩れ・53名墓地

浦上4番崩れの際に、鹿児島へは375名が送られました。これらのキリシタンは福昌寺に預けられ、竹槍で囲いを作り、外部との交渉を禁じられていました。その後、世界各国から批判を受けた明治政府は、1873年に禁教令を廃止し、各藩預けの信徒は長崎へ帰りましたが、鹿児島では53名の死者(自然死と言われている)を出し、この方々が眠っている墓地です。6日はその場所でミサを捧げました。

*京泊天主堂跡

1602年、ドミニコ会宣教師5人がマニラから下甕島の長浜に上陸しました。3年後の1605年には上甕島に教会を建てましたが、数日後、台風のために倒壊し、その翌年に、薩摩藩主島津家久の許可を受けてこの京泊に移り、教会を設立

しました。1609年に薩摩から退去を命じられたドミニコ会の宣教師たちは、教会を解体し、長崎へ赴くことになったのだそうです。現在列福祈願をしている188人の中の一人の殉教者・税所七右衛門は、この教会で受洗しています。



京泊天主堂跡



4番崩れ・53名墓地

◇巡礼を終えての感想は？

実際に時間と労力をかけてその場に行く巡礼は、私たちが信仰の原点に導いてくれるものであると感じました。今回も、あまり知られていない場所に行くことができて感動しました。

それに、私たちのために、史跡まで行く山道の草刈りを前もってしてくれたり、昼食のための場所を提供してくださった人吉教会、川内教会の信者の皆さん方の暖かい歓迎と接待に、同じ信仰によって結ばれていることのありがたさを味わいました。

生涯養成委員会より…

長崎教区のクルシリヨ



「クルシリヨ」と呼ばれる、一つの「カトリック的練成活動」があります。長崎教区では、今年でちょうど40年の歴史を刻んできました。この40年の節目にあたって、「長崎教区におけるクルシリヨ運動」について、簡単に説明させていただきます。

1. 時の流れの中で（歴史）

クルシリヨ運動は、スペインで考案され世界各地で展開されていますが、長崎教区での第一回開催は、1966年の5月でした。それ以来、歴代の教区長の強い奨めのもと、多くの奉仕者・協力者によって、115回開かれてきました。

*参加者は、教会共同体を構成する種々のメンバーである、信徒・司教・司祭・修道者合わせて約3600人。

*使用された会場は、教区内各地の修道院施設・学校・一般研修所などの二十数か所。

*直接・間接の協力者は、各施設の責任者をはじめ、講話を担当する神父様方・信徒のみならず、陰で支えるクルシリヨ修了者（クルシリスタ）、そしてその家族…。

2. 神のみこころを求め続けて

（目的・目標）

以上のように、多くの人々の協力・奉仕と経費を結集して開かれる「クルシリヨ運動」の目的は、言うまでもなく、教会の目的・目標である「福音宣教」です。福音宣教をする信者に生かされた小教区や教区の養成・形成です。

しかし現実には、すべての信者がその目標にそって生きておられるわけではありません。眠っている信徒、遠ざかっている信徒、信仰生活の真の意味・目標をつかんでいない信徒も少なくありません。クルシリヨ運動は、このような人々に目覚めていただくきっかけ（チャンス）を与える一つの「仕掛け」の役を担っていると確信しています。基本的に言えば、わたしたち人間は誰でも、生涯を通して「絶えざる刷新と発想の転換」が求められています。

ですから、エリート信者を養成するとか優秀な信徒をまとめた特別な一つの会を作ろうなどとは、まったく考えていないのは当然です。イエスさまが、いま、自分や教会に望んでおられる「みこころ」を的確に知り、それぞれの立場・

やり方でそれぞれの人生を生きていったくためのお手伝いをする…、ただそれだけを目ざしているのです。

3. より良い教会づくりのために（展望）

確かに、参加者数の減少や奉仕のむずかしさなどの問題をかかえています。しかし、いろいろな形態の黙想会・練成会の間にあつて、より良い教会づくりのためにクルシリヨ運動が役立っていると認知される限り、それに応えていかねばならないでしょう。

今後、今までもどおり、年三回の開催を計画しています。神父様方や奉仕者のみなさんのご苦勞は計り知れないものがありますが、逃げることなく挑戦していく所存です。

へ今年の予定へ

*イエズス会・立山修道院で…

・5月2日（火）夕5日（金）夕

・11月2日（木）夕5日（日）夕

*下五島地区で…

・開催日時・会場とも未定

*問い合わせ先

・相浦教会 0956-47-2442
・大山政輝 095-845-4754



生活教会 の中の



宝亀教会

フォトプラン 山本 富夫

世紀を越えて

宝亀浦を眼下に、緑豊かな地に建つ教会堂。

百余年の風雪に耐え、集う人々を暖かく迎えている。

明治初期、ペルー師の巡回が始まり、「京崎」と「雨蘇」には「民家御堂」があったという。

京崎では一八八五年、仮教会堂を建立。時に、十八戸の信徒たちがいた。

二年後、わずか十二戸の雨蘇でも仮教会堂を建立。

その後、信徒たちは両教会堂の統廃合を希望し、敷地を提供。

一八九八年、聖ヨセフの祝日に現教会堂が献堂され、翌年には、山野 中野を合め、宝亀小教区となった。